

2024(令和6)年度 入学試験問題

東大・医進クラス 2月1日 PM

国語

注意

- (1) 指示があるまで表紙を開かないこと。
- (2) 問題および解答用紙の両方に受験番号・座席番号を記入すること。
- (3) 声を出して読まないこと。
- (4) 解答は全て解答用紙の所定の欄らんに記入すること。

受験番号	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
座席番号	<input type="text"/>				

解答用紙の受験番号欄らんは、1マスに1つずつ数字を記入してください。

※問いに字数指定がある場合は、句読点なども一字として数えます。

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

水道の水で綺麗に洗ったカブを持って調理実習室へ行くと、都はすでに割烹着を着て包丁を手にしていた。炊飯器からは蒸気が鯨の潮吹きのように立ち上っていた。コンロの上には鍋がある。味噌汁でも作ったのだろうか。立ちこめる味噌の匂いに混じって、香ばしい脂の匂いがした。ただの味噌汁でなく、豚汁だ。

「遅かったじゃん」

「手伝いに来てくれればよかったのに」

「私は調理担当だから」

そう言いながら、鶏の手羽元の骨に沿って包丁を入れている。

「今日は何を作るつもり？」

「カブと手羽元の煮物。手を洗ったら、カブを実と葉っぱに分けて」

はい、これレシビね。そう言ってレシビノートを投げてる。内容を確認し、書かれている手順通りに、カブに包丁を入れた。ときどき形が歪なものが出てきて、まな板の上で安定せず、ごつ、ごつと鈍い音を立てながら包丁を動かす。

「あんだ、今日は随分、あれだな」

おもむろに、都が聞いてくる。

「なんだよ、あれって」

「腑抜けた顔。いつもそうだけど、今日はより一層」

都の言葉に反射するように、ははっと笑いがこぼれていた。心が自衛のためにそうしたのかもしれない。

「二者面談だったからさ」

今週、三年生は一週間かけてクラス担任と面談をすることになっている。

「だって、担任は稔だろ？」

「そうだけど、いろいろ考えちゃうだろ」

カブを実と葉に切り分けて、都のレシビ通り葉を適当な大きさに刻んでいった。都は鍋に油を引いて手羽元を並べる。しばらくすると、手羽元の皮が焼ける香ばしい匂いが、鍋から漂ってきた。

黙って両手を動かす早馬に、都は溜め息と共に聞いてきた。

「進路のこととか、稔になんて言ったんだよ。まあ、面談のあとに稔の畑でこき使われてるあたり、答えはなんとなく予想つくんだけどさ」  
本当、遠慮なくずかずかと言ってくれものだ。

「前に少し話しただろ？ 管理栄養士になろうと思ってる。日農大に受かるにはかなり頑張らないといけないみたいで、稔に心配されたよ」  
① 稔の心配って、絶対そこじゃないと思うけど」

けれど、② 彼女の遠慮のなさは、凶太さは、無神経さは、どうしてだか心地がいい。見ないようにしてきたものを、懇切丁寧に目の前に並べてくれるようだった。

「井坂は、小さい頃からやってるスポーツとか、ないのか」

「ないね」

「走るのは好き？」

「嫌いだよ。足が遅いんだ、私は」

「俺は小学校の頃から持久走とかマラソン大会が好きで、中学に入ったら迷わず陸上部に入った」

刻んだカブの葉は下茹でする必要があるらしい。煮物の仕上げに、下茹でしたカブの葉を加えて軽く煮る、と書いてあった。

「箱根駅伝とか、もの凄く憧れててさ、大手町も横浜も小田原も箱根も行ったことないけど、あそこをいつか走るんだらうなって、馬鹿なことを考えてたんだよ」

小振りな鍋に水を入れてコンロの火にかけた。ほのかなガスの香りと共に、青色の炎が揺らぐ。

「その頃からずっとそうだったんだ。学年が上がったり、中学から高校に上がったり、そうやって段階を踏みながら、力のない奴や向いてない奴はふるい落とされていくんだよ。みんな、走らなくなっていくんだ」

「自分もそうだって言いたいの？」

「そうだな。そう思う」

カブの葉を下茹ですている間に、カブを食べやすい大きさに切っていく。こん、こん、こんという調子のいい音が自分と都しかいない調理実習室に響く。

「あんた、それでいいんだ」

「じゃなきゃ、もつと真面目にリハビリしてるだろ」

「その代わり、あんたはここで料理をしてると。気まぐれに稔の畑を手伝って、その食材で料理をして、弟に栄養のバランスの取れたご飯を食べさせてあげている」

「ああ」

「そしてついに部活もこの夏で引退することにして、秋の駅伝の大会も見届けず、管理栄養士になるために受験勉強をする」

「その通り」

「それって、空っぽになった場所を、料理をすることで埋めた気になっただけなんじゃないの」

「都は鍋にだし汁やみりん、醤油、酒、砂糖を入れた。熱された手羽元の油と混ざり合い、耳を揺らすような芳しい音がする。こんな話をしているのだったら、唾液が込み上げてくるだろうに。」

「勝手にやめた兄貴に『お前のために』って顔で食事の世話されてる弟が、可哀想だな」

井坂は、俺を怒らせようとしている。取り乱して、彼女を怒鳴りつけて、腹の底に沈んでいる本音を吐き出させようというのだろうか。

「そうかもしれないけど、どんな世界だって、上に行く奴っていうのはそういうものを無理矢理、背負わされるんじゃないかな」

毎年正月に箱根を走るランナー達も、甲子園に出場する高校球児達も、名人戦に挑む棋士も、文学賞を受賞する作家も。その後ろにはそうなりたくてなれなかった人が山のようにいて、その人達の期待とか願いとかが嫉妬とか羨望とか、そういったものが彼らの肩にはのしかかっているのだ。

俺の分も頑張ってくれとか、あんたは俺達の希望の星なんだから、とか。そんな無責任だけれど強い拘束力を持った言葉に縛られて、きつと年を経るごとにそれは増えていって、それでも走っていくのだ。

眞家春馬はそういう人間になる。

助川亮介も、そうなる。

これからたくさんの人を蹴落として、たくさんの人の夢を打ち破って、終わらせる。諦めた連中は「俺の分まで走ってくれ」なんて言いながら、春馬と助川の中に自分の夢を見続けるのだ。

それこそ、

a

いろんな人の夢を背負って、彼らはずっと走っていく。

「あんた、本当にそれでいいんだ？」

ああ、いいんだ。そう言ったはずなのに、喉が仕事をせず音にならなかった。涙が込み上げてくるのがわかる。涙が目頭に溜まっていくのが、わかる。

「正直さ、怖いんだ、走るの」

「また怪我をするかもって？」

「それもあるし、何より、誰かに追いかけられてるのが怖い。後ろにいた奴が迫ってくるのも、追い抜かれるのも、怖い」

何より、自分を追い抜いた背中が、どんどんどんどん、どんどんどんどん小さくなって、いずれ見えなくなることが、怖い。

「なあ井坂、お前は、きょうだいはいるか？」

「いないよ。そもそも、私ができちゃったことも両親にとつては想定外だったみたいだし」

「そうか、そうなのか。」

「弟って、不思議な生き物なんだ。弟がレースに勝つと嬉しいし、タイムが上がると自分のことみたいに喜べる」  
でも。

「でも、弟に負けるのは、もの凄く怖いんだ。他の人に負けるのとは違う。もつと冷たくて痛いんだ」  
春馬のことを嫌いになれたらいいのにと、何度思っただろう。その方がずっと楽だったはずなのに。

たとえば、箱根駅伝を自分が走っている姿を想像しようとする。憧れの、幼い頃はいつか絶対に走るのだと信じていた場所を。けれどいつの間にかそこにいた自分は、眞家早馬でなくなっている。よく似た、特に目元がそっくりだと多くの人に言われる、眞家春馬の顔になっている。

もう自分は、お終いなのだ。

「怪我をしたとき、悲しかった。悔しかった。でも、安心もしたんだ」

「やめる口実ができたから？」

「もう、俺は弟に負けないで済むんだ」

「ぼたりと、まな板の上に雫が落ちた、出所は、自分の両目だった。ああ、さつきは、稔との二者面談のときは、ちゃんと我慢していたのに。」

「おい、カブに落とすなよ。しよつぱくなる」

手の甲で目元を拭いて、胸に詰まっていたものを吐息と一緒に吐き出した。

「いい隠し味になるよ、きつと」

そう言つて、まな板ごと都のところを持っていく。都は何も言わず、一口大に切られたカブを鍋にごろごろと入れていった。

「こういうときも、慰めてくれないのな、井坂は」

人がどんなに落ち込もうと悲しもうと、いつも通りな奴だ。椅子に力なく腰掛けて、早馬は肩を揺らした。

「なんだよ。慰めてほしいの？」

「少し」

素直に、そう言った。きつと、都は笑い飛ばす。情けない、と。自分で決めたことだろう、と。

けれど、鍋に蓋をした都はその口を開こうとはせず、ゆっくり早馬に近づいてきた。作業テーブルの下から椅子を引き出し、早馬の隣に置く。そこに腰を落とした都は、コンロにかけられた鍋をしばらく眺めていた。

「逃げた方がいいと思う」

コンロの火の音にかき消されてしまいそうな小さな声で、都がそう言う。

「陸上からも、弟に負けることから、逃げた方がいいと思う」

都の手が、むんずと早馬の頭を撫んできた。スーパード程よい大きさのキャベツでも選ぶように驚掴みにすると、そのまま自分の肩口へ引き寄せ、肩に手を回してきた。

抱きしめることはしないし、頭を撫でるなんてこともしない。けれど早馬と肩を寄せ合って、何も言わずただそのままだった。ことごと、ことごと。カブの入った鍋が、小気味のいい音を立てる。

(額賀濤『タスキメシ』による)

問一 〜〜線A〜Cの本文中の意味として最も適切なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

A おもむろに

ア 成り行きに任せて何気なく

イ 覚悟を決めたように急に

ウ 遠まわしにぼんやりと

エ 落ち着いてゆっくりと

B こき使われて

ア 都合のいいように利用されて

イ 手伝うことを強要されて

ウ 罰ばうとして働かされて

エ 遠慮なく使われて

C 小気味のいい

ア 聞いていて気持ちが良い

イ リズミカルで楽しい

ウ 小さくておだやかな

エ 規則的で整った

問二 — 線①「稔の心配って、絶対そこじゃないと思うけど」とありますが、本文の内容を踏まえると、早馬に対する「稔の心配」を都はどのようなものと考えていますか。最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

ア 陸上の道を諦め管理栄養士を目指すのは、怪我の影響えいきやうで弟の春馬や他の選手に負ける怖さから逃げているだけなのではないかという心配。

イ 本心では陸上の道を諦めきれないのに、自らの本心に向き合うことなく管理栄養士の道に進もうとしているのではないかという心配。

ウ 弟の春馬に自らの夢を託たくしそれを支えようという一方的な思いから、管理栄養士という進路を選択しているのではないかという心配。

エ 怪我によって陸上の道を閉ざされた結果、やけになって管理栄養士という無謀むぼうな進路を志しているのではないかという心配。

問三 —— 線②「彼女の遠慮のなさは、凶太きは、無神経さは」とありますが、「彼女」のこうした態度を早馬はどのように受け止めていますか。最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

- ア 目をそらしていたことを見逃さないようにしてくれたうえで、自分をおだてて前向きに陸上に組みませようとするもの。
- イ 自身でも理解していなかったことを整理してくれたうえで、自分に同情して陸上から逃げられる道を示そうとするもの。
- ウ 隠そうとしていたことを論理的に導き出してくれたうえで、自分を動揺させて進路の選択を見直させようとするもの。
- エ 見ないようにしてきたことを目の前に並べてくれたうえで、自分を取り乱させて本音を吐き出させようとするもの。

問四 —— 線③「上に行く奴っていうのはそういうものを無理矢理、背負わされるんじゃないかな」とありますが、「そういうもの」とはどのようなものですか。二十五字以内で答えなさい。

問五 a に入る文章として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 駅伝における途中乗権のように。最後まで走れなかったチームは、より速い走者、先を走っているチームに、襷を繋ぐ願いを託す。
- イ 駅伝で繋ぐ襷のように。いろんな人の汗が染みついた襷は、強い者へ、走り続ける者へと、どんどんどんどん受け継がれていく。
- ウ リレーで渡すバトンのように。第一走者から渡されたバトンは、次の走者へ、そしてアンカーへと、順に受け継がれていく。
- エ リレーにおける予選敗退のように。決勝に進めなかったチームは、決勝に勝ち残った全てのチームに優勝への思いを託す。

問六 —— 線④「胸に詰まっていたものを吐息と一緒に吐き出した。」とありますが、この時の早馬の心情を説明したのとして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 都と話をする過程で、常に引き合いに出され勝ち負けを比較される弟に対する気持ちが嫉妬心であったとわかり、冷静さを取り戻そうとしている。



イ 怪我を口実にやっと陸上をやめられると安心して、自分を都に指摘され、自分でも理解していなかった感情を自覚し、心の底から納得している。

ウ 都との会話から、あなたは私達の希望の星だからといった一方的な期待から逃れられることをよしとする自身の弱さを受け入れ始めている。

エ 弟や他の選手に負けて追いつけなくなることへの恐怖という今まで目を背けてきた自分の弱さを都に打ち明けられたことに、ほっとしている。

問七 —— 線「心が自衛のためにそうしたのかもしれない。」とありますが、どういふことですか。本文全体をふまえて説明したものとして最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

ア 自分の進路について都が遠慮なく聞いてくるのが予想されるなかで、怪我が原因で陸上を諦める悲しさや悔しさをごまかすために笑ったということ。

イ 自分が進路について隠していることを都に知られてしまっていることから、これから都に問い詰められても怒りを我慢できるように笑ったということ。

ウ 自分がいつもと違うことを都に勧められたことで、この先も陸上を続けることが苦しいという本音を見破られないように笑ったということ。

エ 自分の様子がおかしいことを都が察知したことから、全てに対して投げやりになっていることを見抜かれないように笑ったということ。

問八 この小説の登場人物の説明として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 都は遠慮のない物言いで本音に向き合わせようとすることもあるが、本心を打ち明けた早馬に寄り添う優しさも備えている。

イ 早馬は怪我で陸上の道が絶たれたことを悲しんでいる一方で、弟の春馬に対する嫉妬心から解放されることを喜んでいる。

ウ 春馬は現段階では記録で早馬に及ばないが、これから成長して早馬の記録を抜き後を継ぐ存在になると期待されている。

エ 稔は早馬の進路選択が無謀なものだと心配する一方で、怪我で陸上を諦める早馬の悔しさや悲しさに共感している。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

お母さんのお腹の中で40週弱過ぎた赤ちゃんは、身長おおよそ50cm、体重3kg内外で生まれてくる。学校に上がる頃には身長は2倍、体重は7倍近くに増える。単に膨張しているわけではないの言うまでもない。生まれた直後は泣くか、寝るかがほとんどで、起きている時もなんだか体を変な風に動かしているだけだ（この動きはgeneral movementと呼ばれている）。しかし1歳前後から立ち上がってよちよち歩きを始め、単語を話し始める。そして幼稚園に行く頃になると、もう走り回ったりするし、大人とも基本的な会話は十分に可能になる。

I 身体的にも、認知的にも大きな変化を遂げる。もちろん、感情面でも、対人関係でも、大きな変化が見られる。こういう過程はその後もずっと続くのだが、それをふつうは発達と呼ぶ。発達の定義はいろいろとあつて難しいが、最大公約的にまとめると、加齢による非可逆的な変化となる。つまり年齢を重ねるに従った変化であり、第3章で見たような数日、数週間の変化は発達とは呼ばない。また加齢に伴うという場合、ある年齢に達することが重要なのであり、特別な練習や訓練を要さないというのも発達の特徴とされる。

非可逆的というのは、一度変化すると元の状態には戻らないという性質を表す。複雑な文を話し、公園を駆け回る3歳児が、しばらくすると立てなくなり、バブーしか言わない赤ちゃんに戻るといったこともない。一方、英単語や元素記号などは試験前に暗記、つまり練習、訓練しない限り覚えることはできないし、多くの人はしばらくすると忘れてしまい、それ以前の状態に戻ってしまう。こういうのは発達とは言わない。

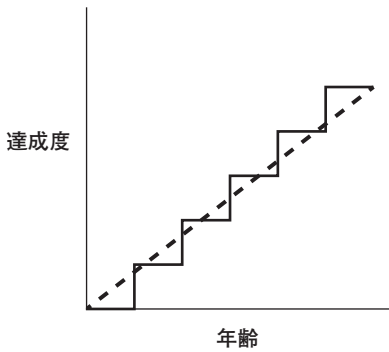


図4・1 a (実線)と b (破線)

こうした不思議な特徴を持つ、劇的な認知的変化が研究者の興味を惹きつけるのは当然だ。実際、ものすごい数の研究者たちにより、莫大な量の研究がなされてきた。

発達という言葉は「段階」という言葉とペアになり、発達段階というものが出来上がる。心理学などを勉強していなくてもこの言葉は聞いたことがあると思う。文部科学省の学習指導要領にも、総則の最初の文のなかに「発達の段階に即して」とか、「発達の段階を考慮して」というような文言が入っているの、当たり前前と思うかもしれないが、少なくとも20世紀前半くらいまではそんなことはなかった。

あまりにふつうに使われているので、その意義を理解している人は少ないかもしれない（実はその意義を本章で否定するのだが）。心理学では、段階は漸進の反対語のような意味で用いられる。図4・1をみていただくとわかるのだが、段階という場合は何か突然に変化することを意味する。一方、漸進というのは徐々に進んでいく。もう一つだけのこと、変化の前後に質的

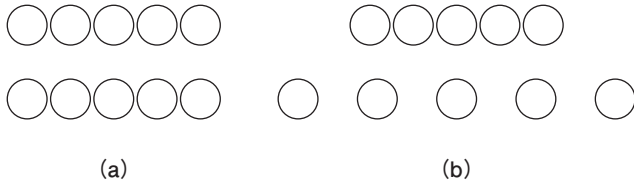


図4-2 数の保存課題。はじめに(a)のように並べさせたあとに、一方の列の間隔を変化させ、(b)のようにする。

な違いがあるという点だ。質的に違うということとは、心理の問題として考えれば、発達の前後では物の見え方、考え方が根本的に違うといふことになる。もつと言えば住んでいる世界が違うということだ。

これはある意味で素敵な考えではないだろうか。乳児は10%ほど大人であり、幼児になると40%、中学生になると70%などという、子供を大人の縮小コピーのように考えるのではないのだ。独自の世界でものを見て、考えるユニークな存在なのだ、そういうことを発達段階論は唱えている。発達段階論が乗り越えようとした伝統的な子供観は、西洋の古典絵画などにも見られる。明らかに生後1年未満の子供なのに6、7頭身もあるものがある。正確に測ったことはないが、そんなはずはないのだ。せいぜい4、5頭身くらいでしかないはずなのに、ほとんど大人と同じ比率で頭と体が描かれているものが少なくない。これは要するに縮小コピーの考え方を反映しているのだと思う。こうした絵を描いた画家たちが、写実を目指していたことを思うと、当時の漸進的な、縮小コピー的な子供観が透けて見る。

発達段階論というのは当時のこうした見方を覆す、とても革新的なアイデアだったのだ。こうした発達段階というものは、子供に大人の考えを押し付けても無意味だという考え方も生んだ。これは児童中心主義と呼ばれている。この考えは早期教育の否定にも貢献をした。

フランス、スイスで活躍した20世紀を代表する心理学者であるピアジェ (Jean Piaget) は発達段階という考え方を広く世の中に知らしめた人であるが、彼の行った研究に心理学者ならば誰でも知っている<sup>③</sup>数の保存課題というものがある。これはまず図4・2(a)の下段に示したように実験者がおはじきを子供の前に並べる。そして同数のおはじきを並べるように子供に言う。子供はこのような場合、たいてい図4・2(a)上段のようにおはじきを並べる。次に実験者は片方の列のおはじきの間隔を縮める、あるいは広げるかして、子供におはじきの数は同数か否かを確認する(図4・2(b))。この実験の結果を教科書風にまとめると、次のようになる。3歳児はそもそも同数のおはじきを並べることが自体が困難である。4歳児は間隔を変更したあとの質問に対して誤った答えを述べてしまう。つまり列の長さが変わったことにより、数が変化すると判断してしまうのである。5歳児くらいになると、大人と同じように、列の長さが変化しても数は変化しないと正しく答えることができるようになる。

こうしたことを言うと、子供は数なんかわかっていないからそう答えるのだと考える人もいるかもしれない。しかし、幼児を馬鹿にしてはいけない。間違えてしまう段階の子供でも数は5くらいまでは簡単に数えることができるし、簡単な足し算だってできる。にもかかわらず、取り去ったり、付け足したりしていない列の数が変化すると答えてしまうのだ。この結果は発表当初から大きな関心を集め、世界中の発達心理学者が追試を行った。標準的な条件下ではピアジェの結果とほぼ同様の結果が得られることが多かった。こうした結果は、年少、年中の子供は見かけに依存した推論を、年長の子供は論理に基づいた推論を行うという形でまとめられた。

## II

1980年代あたりから右記の標準的見解を覆す結果がいくつも報告されるようになった。たとえば、マイケル・シエガル・ドナルドソンは保存課題では列の変形操作が文脈として不自然であり、それゆえ4歳児は不適切な回答をしようと考え、変形操作が自然な文脈の下で保存課題を実施した。どんな課題かといえば、最初に子供が正しく同じ個数のおはじきを並べた後に、いたずら好きのクマ（マペット）が現れ、その列の間隔を変えてしまうというシチュエーションにして、その後二つの列の数は同じかと問うものであった。その結果、それまでに非保存児と言われていた多くの子供が、適切な判断を下すことが明らかになった。

III、私の友人であったマイケル・シエガル (Michael Siegal) は非保存児たちに、別の子供の保存課題での反応をビデオに収録したものを提示した。ビデオのある場面には列の長さに基づく非保存反応、別の場面には「変わらない」という保存反応をする子供の様子が収録されていた。このビデオの各場面を子供に見せたあとに、「この子（登場人物）は本当に本当にそう考えて答えたのかな、それとも大人の人（ビデオに登場する実験者）を喜ばせようとして、わざとそう答えたのかな」という質問をした。すると、驚くべきことに、このビデオを見た非保存児の多くは、非保存反応のビデオに対しては「この子はわざと間違えている」と答え、保存反応のビデオに対しては「この子は本当にそう思って答えている」と答えたのである。

他にも同様の結果を生み出した研究はたくさんあるのだが、それらはすべて非保存児と言われてきた子供の中に、本当は数の保存を可能にする認知的リソースが存在していることを示している。通常の保存課題では、課題の特性からこのリソースの働きが押さえられる一方、長さなどの無関連情報に誘引されたリソースが強く働き、その結果非保存反応が誘発されるのである。複数のリソースが子供の中に存在し、これらが課題状況の与える情報との関連で、機能したり、しなかったりするというわけである。

ここでは数の保存課題というものだけを取り上げた。ただピアジェをはじめとした発達段階論を主張する実験結果はほとんどすべて同じような事態となっており、彼らが想定したよりもずっと早くから子供は課題を適切に遂行することができることが明らかになっている。つまり<sup>⑤</sup>子供は別世界の住人ではないということだ。

（鈴木宏昭『私たちはどう学んでいるのか 創発から見る認知の変化』（二部改変）による）

問一 I III に入る語として最も適切なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア ところが      イ たとえば      ウ また      エ なぜなら      オ つまり

問二 — 線①「それをふつうは発達と呼ぶ。」とありますが、この「発達」の具体例として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 小学生になって、見えないものを想像できるようにする。
- イ 空手道場に通って、初段の審査しんさを受けられるようになる。
- ウ 練習を繰り返して、きれいな文字を書けるようになる。
- エ 十八歳になって、乗用車の運転ができるようになる。

問三 — 線②「その意義を理解している人は少ないかもしれない」について、次の問いに答えなさい。

- (i) 「その」が指している内容として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
  - ア 心理学などを勉強していない人々を中心となつて取り組んだ「発達」について学ぶ機会かいくわいの獲得。
  - イ 20世紀前半くらいまでに人々の間で生じた「発達」という言葉の意味の急速な広まりと活用。
  - ウ 「発達」に興味を持った多くの研究者によって行われた発達段階についての莫大な量の研究。
  - エ 「発達」という言葉と「段階」という言葉が結びついて生まれた発達段階という考え方。

- (ii) 「その意義」とはどのようなものですか。最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。
  - ア 子供をユニークな存在として認めることなく、大人の考えを押し付けるような教育を肯定こうていしたこと。
  - イ 子供を大人の縮小コピーのように捉え、早期に教育すればその分早く成長するような見方を覆したこと。
  - ウ 子供と大人の認識の仕方の違いをもとに、子供と大人の住んでいる世界をわけて考えるようになったこと。
  - エ 莫大な量の研究とその成果によって、子供が大人になる過程や変化をより正確に測れるようになったこと。

問四 図4・1の a ・ b に入る語を本文中からそれぞれ探し、漢字二字で抜き出して答えなさい。

問五 — 線③「数の保存課題」について、「4歳児」はこの実験でどのような回答をする傾向がありますか。次の文を完成させる形で、わかりやすく説明しなさい。

1 (五字以内) が変わると、 2 (十字以内) と判断してしまったために、 3 (十五字以内) 傾向がある。

問六 — 線④「変形操作が自然な文脈の下で保存課題を実施した。」とありますが「変形操作が自然な文脈」として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア おはじきを並べたのが誰なのかを擬人法を用いて明確にした文脈。
- イ おはじきの列の長さが変化した状況が具体的に想像しやすい文脈。
- ウ おはじきの数が変わった根拠が論理的に理解しやすい文脈。
- エ おはじきを用いて実験をした理由が時系列でわかる文脈。

問七 — 線⑤「子供は別世界の住人ではないということだ。」とありますが、どういふことですか。本文全体をふまえ、次の空欄に適切な内容を補って説明を完成させなさい。

子供が想定していたよりもずっと早い段階から保存課題を適切に遂行できるということは、(三十字程度) ということ。

問八 次のア～オについて、本文の内容と合うものにはA、合わないものにはBを書きなさい。

- ア 発達における非可逆的かつ漸進的な認知的変化が多くの研究者の興味を惹きつけた。
- イ 伝統的な子供観を示すものとして西洋の古典絵画における子供の描かれ方を例にしている。
- ウ ピアジェが行った数の保存課題について誤解を与えた研究や実験として非難している。
- エ 具体例を挙げ非保存児にも数の保存を可能にする認知的リソースが存在することを示している。
- オ 発達段階に関する標準的な見解を筆者の主張の根拠・補足として肯定的に紹介している。

【三】次の問いに答えなさい。

問一 次の文の「に」と同じ使い方をしているものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

作った料理を父と母にふるまった。

ア スタートの時を迎え、競技場内は静かになった。

イ いたずらをした子が親にしかられた。

ウ 私の将来の夢は医者になることだ。

エ 教室は大いに盛り上がった。

オ 兄に背丈が追いついた。

問二 次の傍線部の述語(述部)に対応する主語を、一文節で書き抜いて答えなさい。

富岡製糸場で生産された生糸は八王子を経由して横浜港まで鉄道で運ばれた。

問三 次の□にア～オのいずれかを入れてことわざ・慣用句を完成させるとき、一度も使わないものを一つ選び、記号で答えなさい。

紺屋の□袴

□の他人

□田買い

□の黒髪

ア 赤 イ 青 ウ 緑 エ 白 オ 黒



問四 次の□にア～コのいずれかを入れて類義語を完成させるとき、①～④に入るものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

順序 ①  
②  
③  
④  
貢献

語群

ア 番 イ 適 ウ 次 エ 所 オ 与  
カ 寄 キ 第 ク 列 ケ 奉 コ 続

問五 次のア～エの文の順序を整えて意味の続きがはつきりした文章にするには、どのような順序にすればよいですか。はじめから順に記号で答えなさい。

ア 花が咲くと茎が太くなり太陽に向けて花を傾けることが難しくなるため、ほとんどのヒマワリは東向きに花を咲かせ、その向きで固定されるのです。  
イ 実際、ヒマワリは太陽の光を多く受けようとするため太陽の方角に向かって伸びますが、それは花が咲く前の段階までといわれています。  
ウ 漢字では「向日葵」と書くため、太陽の方角に向けて花を咲かせると思われることが多いです。  
エ 夏になるとヒマワリが咲き、その明るい色と立派な花で私たちを楽しませてくれます。

【四】 次の①～⑩について、——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 基準を厳格に守る。
- ② 独立を宣言する。
- ③ 樹木がおいしげる。
- ④ 納税の義務がある。
- ⑤ 快く引き受ける。
- ⑥ 本を三サツ借りる。
- ⑦ ジコク表を調べる。
- ⑧ キチヨウ品は持ち歩く。
- ⑨ 文字をカクダイする。
- ⑩ ヤクワリ分担をする。

解答用紙

2024  
（令和6）年度

国語

東大・医進クラス  
2月1日 PM

受験番号	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
座席番号	<input type="text"/>				

得点	<input type="text"/>
----	----------------------

問一	A
問二	
問三	
問四	
問五	
問六	
問七	
問八	

問一	I
問二	II
問三	III
問四	
問五	
問六	
問七	
問八	

問一	I
問二	II
問三	III
問四	a
問五	b

問五	3	1
問六		
問七		
問八		
問九		
問十		
問十一		
問十二		
問十三		
問十四		
問十五		
問十六		
問十七		
問十八		
問十九		
問二十		
問二十一		

問六	
----	--

問七		
問八		
問九		
問十		
問十一		
問十二		
問十三		
問十四		
問十五		
問十六		
問十七		
問十八		
問十九		
問二十		
問二十一		

問八	ア
問九	イ
問十	ウ
問十一	エ
問十二	オ

問一	
問二	
問三	

問四	①
問五	②
問六	③
問七	④
問八	⑤
問九	↓
問十	↓
問十一	↓

⑥	①
⑦	②
⑧	③
⑨	④
⑩	⑤
	<

模範解答

2024年度

東大・国語  
医進クラス  
2月1日PM

【一】 35点 【二】 35点 【三】 20点 【四】 10点

受験番号	
座席番号	

得点 100

【二】

問一	A
	エ
	B
	エ
	C
	ア

問二	イ
問三	エ

問四	途中で挫折した人達からの、期待や願いや嫉妬や羨望。
----	---------------------------

問五	イ
----	---

問六	エ
----	---

問七	ウ
----	---

問八	ア
----	---

【三】

問一	I
	オ
	II
	ア
	III
	ウ
問二	ア

問三	(i)
	エ
	(ii)
	イ

問四	a
	段階

b	漸進
---	----

問五	3	1
	おはじきの数を誤って答える	列の長さのおはじきの数も変わる
	2	

問六	イ
----	---

問七	根本的に違うわけではない	大人と子どもとの間で、物の見え方や考え方が
----	--------------	-----------------------

問八	ア
	B
	イ
	A
	ウ
	B
	エ
	A
	オ
	B

【三】

問一	オ
----	---

問二	生糸は
----	-----

問三	オ
----	---

問四	①
	ウ
	②
	キ
	③
	カ
	④
	オ

問五	エ ↓ ウ ↓ イ ↓ ア
----	---------------

【四】

⑥	①	冊	げんかく
⑦	②	時刻	せんげん
⑧	③	貴重	じゅもく
⑨	④	拡大	のうぜい
⑩	⑤	役割	こころよ(く)

1点×10

完答2点×2  
5点

4点  
3点  
4点

1点×5

6点

2点

1...1点  
2...2点  
3...3点

2点×4

2点×4

4点×4

5点

4点×2

2点×3